

令和5年度の学校支援プロジェクトの一部紹介①

上越市

教師による勇気づけの理論を援用したフィードバックが、学級雰囲気に及ぼす影響に関する事例研究

本研究の目的は、アドラー心理学に基づく勇気づけの理論と技法を援用した教師のフィードバックが、学級雰囲気に対してどのような影響をもたらすか明らかにすることである。先行実践に基づき勇気づけのフィードバックのカテゴリーを作成し、研究協力者のフィードバックの在り方や場面について教示介入を行った。その結果、児童の貢献協力に目を向けた教師の受容的共感的な働きかけが学級のポジティブな雰囲気や人間関係形成に寄与する可能性が示された。

豊かな「関わりと振り返り」を生み出す支援

～ICT活用を中心とした探究的な学習を通して～

本支援プロジェクトでは、連携協力校からの要望をもとに、「豊かな『関わりと振り返り』を生み出す支援～ICT活用を中心とした探究的な学習を通して～」をテーマとして支援を行った。具体的な手立てとして、「教職員・児童のICT活用力向上に向けた全般的な支援」と「ICTを活用した探究的な体育授業作りへの支援」を実施した。「教職員・児童のICT活用力向上に向けた全般的な支援」では、学習に使えるアプリケーションの提案を行うとともに、児童のタイピング技能向上に取り組んだ。タイピング技能については、技能向上に取り組んだ期間の事前と事後の文字入力数の増減をみると、児童のタイピング能力の向上が見られた。「ICTを活用した探究的な体育授業作りへの支援」では、体育の学習において適切な場面でICTを活用することや、デジタルポートフォリオの作成と保護者への学習情報の提供が、探究的な学習を生み出したり、児童の学習不安を解消したりすることが示唆された。

基礎定着のための一人ひとりの能力・特性に応じた指導 —家庭科教育の視点から—

小学校学習指導要領解説家庭編の目標は、「家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする」とある。そのため、昨年度に引き続き「基礎定着のための一人ひとりの能力・特性に応じた指導」をテーマと設定した。また、児童が生活で活かせる基礎的・基本的な知識や技能を、習得できるような支援を意識した。支援を通して、児童自身に考えさせたり体験させたりすることが、基礎の定着や授業で学んだことを日常で活かすことにつながると気づいた。一人ひとりの能力や特性は異なるため、基礎力定着のための全体への支援、及び一人ひとりの支援について考えることが課題である。

地域活性化プロジェクトへの支援と授業実践について

まず、地域活性化プロジェクトにおいて、生徒たちは地域の良さや課題について考え、地域の情報を発信したり商品を開発したりして、魅力ある町づくりのためにできることを考えた。各場面で生徒の考え

を深められるような声がけや活動の手助けとなるような指導を行った。その結果、生徒たちの地域の魅力に関する理解が深まると推察される。

次に、授業支援の目的は、授業導入時における自然事象の提示を工夫し、生徒の驚き発見型興味と思考活性型興味を喚起することであった。第1学年を対象に授業実践と質問紙調査を行った結果、授業の前後で有意な向上は認められなかったため、効果的な支援ができたとは言い難い。これは、学習内容の特性上、両方の興味を促す自然事象を複数提示することが困難であり、1つの単元だけでは不十分であったことが要因として挙げられる。今後、他の学年や単元での授業実践が望まれる。

文章題の理解における教科横断的な授業支援の取り組み

学校支援の目的は、連携協力校の教育目標の一つである「確かな学力」の獲得のために、児童の算数文章題の理解を深めることである。本研究では、昨年度の研究成果を踏まえ、児童が算数文章題においてつまずきを感じる原因を明らかにすることをねらいとした。発達段階に即したつまずきの原因を探るとともに、その解決を図るための「文章題の理解における教科横断的な授業支援」の実践を行い、成果と課題を支援内容に基づいて明らかにした。

一人一台タブレット端末の活用による 主体的・対話的で深い学びの実現

主体的・対話的で深い学びの実現にICTを活用することは有効である。GIGAスクール構想により令和2年度から児童生徒一人につき一台ずつタブレット端末が導入された。本支援プロジェクトでは、授業におけるタブレット端末の有効活用を通じて、子どもの主体的・対話的で深い学びを実現することに取り組んだ。具体的には、タブレット端末(iPad)の有効活用とプログラミング教育の必修化への対応により、連携協力校の情報化の促進を図り、児童の学びの充実へとつなげた。

中学校における熱中症リスクの推定方法の開発

本研究の目的は、気温や湿度などの気象条件と保健室の来室者数との関連を明らかにし、中学校における熱中症リスクの推定方法を開発することである。2021～2023年度の気温およびWBGTと来室者数を分析した結果、2月と8月を除いて気温およびWBGTと来室者数との間には正の相関関係が見られ、来室者数が気象条件に影響されている可能性があることがわかった。また対象の中学校では、気象条件に合わせた保健指導を行うことで、年間最大88～108人の来室者を減らせる可能性があることがわかった。今後は、効率的な個別保健指導を実施できるように、体力テストの結果から熱中症リスクが高い生徒をスクリーニングできる技術を開発する予定である。

令和5年度の学校支援プロジェクトの一部紹介②

柏崎市

よりよい人間関係づくりを目指して

～アセスメントに基づいた授業プログラムの実践～

本プロジェクトの目的は、予防教育の視点による良好な人間関係づくりに生かせる学級活動の授業案を提案し、集団の資質・能力を向上させることである。柏崎市立X中学校は、いわゆる「一小学校一中学校」で校区編成されており、私たちが昨年度から実践を行っている2クラスでは固定化された人間関係の中、いかにネットワークを広げていくかが課題の一つとなっていた。そこで私たち支援チームはアセスメントツールCoCoLo-34を使用し、集団アセスメントを行った。その結果をもとに、集団の資質・能力を向上させるための授業を作成、提案、実施することでよりよい人間関係づくりを目指した。

AIやICTを活用した技術授業の教材開発、

学校業務・教科指導の改善

学校支援の目的は、次の3点である。第1は、校内におけるICTの環境整備である。『GIGAスクール構想』により1人1台に貸与された学習端末の教育内における活用の提案や学習端末の運用の方法やルールづくりに関して担当教諭をサポートする形で支援した。第2は、技術の授業におけるICT活用支援である。特に計測・制御におけるプログラミング学習のカリキュラムマネジメントに向けた調査や授業における生成系AIを活用した生徒の学習評価の調査研究を行った。第3に、活用場面の提案を含めた研修に関わる支援である。学校評価などの定性データの分析方法を提案することを行った。これらの結果、生成系AIを活用した学習評価については、評価の補助という活用以外にも指導教材として活用の可能性を見出すことができた。

糸魚川市

主体的・対話的で深い学びを促す道徳科の創造

～「考え方、議論する道徳」を実現する多様な指導方法の活用を中心に～

連携協力校では、「児童の発言に対する問い合わせ」、「多様な指導方法による授業の工夫」の2点について難しさを感じていた。そのため、本チームでは、指導方法(発問や対話)を工夫(活用)した授業づくりを通して、その効果を調査分析により検証した。その結果、多様な指導方法を用いて学級担任と児童との対話の生起が促されたと考えられる。そのため、授業者の課題として挙げられていた、「多様な指導方法による授業の工夫」の改善に寄与したと考えられる。

協同学習とファシリテーション技術に基づく

ジグソーリーディングと継続的なスマートトークの活動が

生徒の主体的な英語使用に与える効果

本学校支援プロジェクトでは、連携協力校の要望と生徒の実態を踏まえ、協同学習とファシリテーション技術を取り入れたジグソーリー

ディングと継続的な言語活動を設定することにより、学び合い伝え合う生徒の育成と自らの学習を調整し粘り強く取り組む生徒の育成を目指すことにした。その成果の検証として、アンケート調査、振り返りシート及び会話分析をもとに生徒の変容を分析した。事前と事後の質問紙調査の結果、コミュニケーションへの意欲(WTC)の有意な上昇傾向が見られた。本実践が、主体的な英語使用の向上に有効である可能性が明らかとなった。

妙高市

中学生の地域貢献活動意欲の醸成に関する一考察

～連携協力校在籍中学生の意識調査を通して～

本研究の目的は、連携協力校中学生への意識調査を通して、中学生の地域貢献活動意欲醸成に関する提言を行うことである。アンケート及びインタビュー調査の結果、参加経験と参加意思の間には、一定の関係があると分析することができた。そこで調査対象者をこの分析に基づいて参加経験と参加意思の有無で4群にわけ、それぞれ考察を行ったところ、中学生に対する地域貢献活動への参加意欲醸成には、学校として短期的な支援と長期的な支援が必要であり、それらの具体的な方策についても示すことができた。

生活科単元「六十市での交流活動」の

社会科との接続の観点からの授業分析

今年(2023)度妙高市立Y小学校第2学年生活科では、妙高市の定期市である六十市での交流活動を行った。本単元では、第3学年以降行われる社会科との接続を意識しており、交流活動を通して、児童が「はたらく人」に目を向けることをねらいとしていた。本報告では、交流活動のメイン活動であった出店活動の付箋紙での振り返りと、作文での振り返りを分析した。その結果、「はたらく人」の中でも、はたらく自分に目を向けることは多くの児童が行うことができたが、はたらく他者に目を向けることは難しいことが明らかとなった。はたらく他者に目をむけるにあたり、まずは、はたらく友達に目を向けることが有効なのではないかと考える。

児童の自発的、自動的な活動を促す「学級会」の

合意形成過程の支援

～第5学年学級活動の実践から～

連携協力校である妙高市立Z小学校の連携要請を踏まえ、本研究では、児童の自発的、自動的な活動を促す学級会の組織づくり及び、学級会の合意形成過程の支援を行った。その結果、学級会とその後の実践を通して、児童がメタ認知的活動(モニター・照合・調整)を自発しており、学級会の組織づくりの支援は、児童の自発的、自動的な活動を促すことにつながることが示唆された。